ようこそ、お大師さんのおる島へ

福蔵寺住職
河野　之伴

へんろ市

ここ大島には、「へんろ市」と言われ、旧暦の3月20日前後の3日間、島内の88の札所を廻る島四国が伝えられてきました。ここ数年は、3日間で3～4千人がお参りしているといわれる「へんろ市」ですが、その歴史は古く、江戸時代、文化4年（1807年）に島の医師、毛利玄得が仲間と共に始めたという記録が残っています。※（参考HP）それから数えると今年はちょうど200年。島では今年、5月5・6・7日の「へんろ市」や10月28日の大法要など、一年を通したイベントで島四国開創200年をお祝いします。それに合わせて数年前から、老朽化したお堂を建て替えたり、石碑案内板を設置するなど、地域の人が主体となって準備を進めてきました。

去年の「へんろ市」　福蔵寺境内で地域の人が甘酒をお接待

お接待

ところで、私は10年前、大阪でのサラリーマン生活をやめて大島にかえり、お寺を継ぎました。そして最初に驚いたのは、この霊場が生きているということでした。生きているというと誤解されるかもしれませんが、霊場が生活に根付いたものであるということです。朝、お寺の近くのお堂には、おばあちゃんたちが集まってきて、おしゃべりをはじめます。そして話が終わると、お大師さんに「おかげさまで」と手を合わせ「チーン」と鳴らして帰って行く。お大師さんがちゃんとそこにいる。時々、島内のお堂ものぞいてみますが、普段から掃除されて、お供えがあって、ちゃんとお香の香りがしているのです。そんな暮らしが根にあって、大島の人は「へんろ市」ともなると、お遍路さんに「あれ持って行き！」と声をかけ、おもてなしをしますが、そういう意味では、お接待とは、大島の人たちの暮らしの喜びのお裾分けと言えるでしょう。

「第10回歩いてみよや島四国」で甘酒をお接待

「歩いてみよや島四国」

数年前、大島に大きな変化がもたらされました。しまなみ海道の開通です。私自身、これほど影響が大きいとは思っても

※参考HP　URL
http://shima-shikoku.jp/index.htm

いませんでしたが、しまなみ海道の開通で、大島はもはや島ではなくなったのかもしれません。島四国として親しまれている「へんろ市」は、かつては船で島を訪れ、3日間、歩いて廻って再び船で帰るものでした。全国には、もう何十回も参加しているという熟練先達さんがいて、その方々が仲間を引き連れてやってきます。そして、その中から次代の先達たちが現れ、また仲間を連れてくるという仕組みが出来ていました。これが200年もの長い間、「へんろ市」を継続させた理由の一つです。しかし、ここ数年は、訪れる人の約8割が島に車でやって来て、小グループで廻るようになり、この仕組みが成り立たなくなってきました。一方で、おへんろさんを暖かく迎え入れてきた島内でも、少子高齢化が急に進み、善根宿※をする家は数軒にまで減りました。

200年続いてきた「へんろ市」の良き伝統を次の世代に残したいとは思っていても、こうした状況では困難なことも多くあります。けれども「200年祭という大きな節目を打ち上げ花火にしてはいけない」、「200年以降の島四国のあり方も考えよう」と、島の有志が集まって、島四国心のふるさと会をつくり、5年前から「歩く」という原点に帰った「歩いてみよや島四国」をはじめました。

「歩いてみよや島四国」は、「へんろ市」で3日をかけて廻る道のりを約10kmごとの7コースに分けて廻れるようにしたものので、その名のとおり、島の自然や人情を感じながら歩いて島四国を廻ります。これまでは毎年春と秋に2回ずつ行ってきましたが、回を追う毎に口コミで参加者が増え、今では300人近い人たちで賑わっています。

その時にも地域の人たちが思い思いのお接待をしています。イベントというよりも生活の延長として、ここではお接待の心が、一人一人の遺伝子に染み付いているのです。島四国200年の歴史は、ここにそんな土壌を作ってきました。

大島の人たちの生き甲斐や誇りに繋がる島四国。なによりも生活に根付いた島の風土を守り、次代に伝えていきたいと思っています。

※善根宿
修行僧やお遍路さん、貧しい旅人などを無料で宿泊させる宿。
大島では、へんろ市ともなると数日前から布団を干すなど、
労を厭わずお遍路さんをもてなす準備をしている。

愛媛自然100選のひとつ「大島自然研究路」歩くお遍路さん

千年松前の海岸で「波潅頂」の儀式。親しい故人の名を砂浜に書いて波に流しご供養している

十五番札所前にて般若心経を唱える参加者

島四国心のふるさと会のメンバーがボランティアで島四国開創200年。記念のへんろ道しるべを立てた